川崎市

川崎市役所本庁舎 さよならイベント

本庁舎記念アルバム

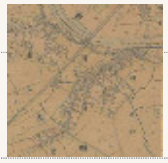
写真：© 羽田 猛市

川崎市役所本庁舎は、秋以降、解体を行い、新本庁舎完成時に低層棟として復元する予定ですが、解体工事に入る前に、市民の皆様が庁舎内を探検できるイベントを開催しました。

本アルバムは、皆様に、戦前から続く本庁舎の歴史や、地域のめまぐるしい変化に思いをはせ、本庁舎の雄姿を記憶に留めていただけるように、本イベントを記念して発行しました。

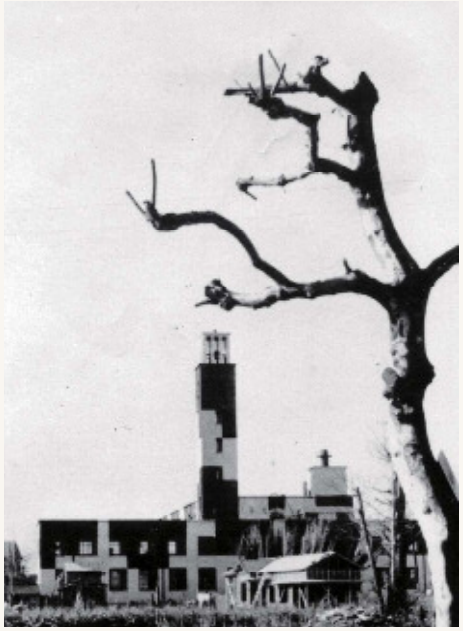
今後、新本庁舎の低層棟として本庁舎が新築復元されることを楽しみにしていただけますと幸いです。

本庁舎の主な歴史

	年代	事項	当時の様子
明治	2年（1869）	田中本陣長屋に「戸長役場」を置く。	江戸時代の東海道を表した地図。田中本陣の位置がわかる。『東海道分間延絵図第一巻』道中奉行所（文化3年） 重文（部分）／東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives
	20年（1887）	「町役場」へ改称し、砂子に仮役場を設置。その後、2度移転する。	明治の迅速測図 
	44年（1911）	堀之内345番地（その後宮本町61番地になり、区画整理後、宮本町5番1となる。現在の本庁舎の敷地に対し、北東側はす向かいの場所）に移る。	
大正	12年（1923）	関東大震災で被災したが、町役場はつっかえ棒で補強して継続使用	市制施行時（大正13年）の写真 町役場時代から継続して使用しているつっかえ棒が写っているのが分かる。
	13年（1924）	7月1日 川崎市制施行 町役場庁舎を、そのまま市役所庁舎として使用した。加えて、旧川崎尋常高等小学校校舎及び敷地を譲り受け、市役所分室として使用した（現在の本庁舎の位置）。	大正14年発行 『大日本職業別明細図之内 川崎市』
	14年（1925）	市役所分室として使用していた旧川崎尋常高等小学校跡地を、正式に市役所の位置として定める。	昭和2年発行 『三千分之一 川崎』の抜粋
昭和	9年（1934）	庁舎改築予算案が市議会で可決 川崎市技師建築課長に元田稔氏就任	昭和11年発行 『川崎市勢要覧』
	11年（1936）	本庁舎起工	
	13年（1938）	本庁舎竣工 本館3階建、東館2階建 総工費568,670円 敷地面積5,676.0㎡　建築面積1,938.5㎡ 延床面積6,994.0㎡	
	戦　中	戦中、本庁舎が防空偽装される。 その後、周囲が焼け野原となる中、焼失を免れる。	平和館所蔵写真より
	25年（1950）	東館を2階建てから3階建てに増築	昭和25年 増築時の図面 写真：© 羽田 猛氏
	34年（1959）	大規模改修を実施。北館を増築。本館を3階から4階に増築。ほぼ現在の姿となる。	昭和30年代の写真では、現在の第2庁舎敷地に市役所別館が建設されていたことが確認できる。
	36年（1961）	第2庁舎竣工	竣工時の写真 昭和35年11月の写真 市民ミュージアム所蔵写真より
	56年～57年（1981～1982）	本庁舎外壁補修工事実施（タイル貼替え）	
平成	5年（1993）	第3庁舎竣工	
	28年（2016）	耐震性能不足などのため、本庁舎の使用を停止し、閉鎖。	

大正13年 川崎市制施行記念写真

昭和13年 本庁舎竣工時の様子



稲毛神社付近から見た市役所（平和館所蔵）

空襲後、焼失を免れた本庁舎（平和館所蔵）

本庁舎東館が昭和25年に2階から3階に増築された後、本館が昭和34年に3階から4階に増築されました。
この写真は、東館・本館ともに3階建になっており、昭和25年～昭和34年のわずかな期間を記録した1枚です。
写真：© 羽田 猛氏

昭和34年に本館が3階から4階に増築され、ほぼ現在の姿になりました。この写真は、その後に撮影されたものです。
市民ミュージアム収蔵写真

本庁舎の概要

〈概要〉

- 鉄筋コンクリート造（一部鉄骨鉄筋コンクリート造）
- 昭和13年（1938）竣工。3階建、地下1階、時計塔は地上約36m
- 昭和25年（1950）に東館を2階から3階に増築し、その9年後の昭和34年（1959）には、本館を3階から4階に増築し、併せて北館を増築している。また昭和40年代以降に、窓をスチールサッシからアルミサッシに交換し、昭和50年代後半にはタイルも全面交換している。

〈建設の経緯〉

関東大震災後から昭和初期の市役所は、元川崎尋常高等小学校校舎の古材を利用して建築されたと考えられます。昭和になり合併が進み、工業港湾都市として発展した川崎は人口も増加、それまでの市役所は狭くなり「不朽は危機を感ずるまでの状態」だったようです。

本庁舎の建設は、昭和9年（1934）に改築予算案が市議会で可決されました。昭和10年（1935）に設計が完了し、昭和11（1936）年に着工され、そして昭和13年（1938）に竣工となりました。

〈設計者 元田稔氏〉

明治34年（1901）、東京都生まれ。

父は、日本聖公会東京教区初代監督（主教）になった元田作之進氏。その影響で20歳の頃に洗礼を受けています。教会建築で有名な建築家です。

元田稔氏は、大正11年（1922）に旧東京帝国大学工学部建築学科に入学し、当時の日本の近代建築初期を担った伊東忠太、佐野利器等の教師陣に学びました。卒業後は、東京市技手、川崎市技師建築課長（初代）、海軍技術少佐等を経て、昭和25年（1950）元田建築設計事務所を開設。多くの作品を手がけました。

【写真出典】
川島洋一、小幡圭二（2011）
「建築家元田稔の建築観と教会建築デザイン手法」
東海大学紀要芸術工学部第4号

本庁舎新築当時の完成予想パース

■元田稔氏が川崎市役所の設計を行うに当たり影響を受けたと思われる建築

ストックホルム市庁舎

ヒルベルスム市庁舎

■元田稔氏の作品

左：高井戸教会
右：横浜聖アンデレ教会

創建当時の技術とかかわった人たち

〈現在も残る創建当時の技術〉

木目塗り（市長室）

残存が確認された創建当時の金属製の建具のうち、市長室に設置されている扉には「木目塗り」が施されています。木目塗りとは、木目調に塗装する方法で鉄材やモルタル面を木材に見せかけるために用いていました。昔は寺院や洋風建築に多様されていたようですが、戦後になると次第に見られなくなった技術です。
（写真：© 山岸 剛氏）

黒色大理石とテラコッタ（講堂）

講堂で見られるプロセニアム（舞台を額縁のように囲む建造物）は黒色大理石で当時のまま残されています。またその内側にある付け柱も当時のまま残されていて、テラコッタ製です。
（写真：© 山岸 剛氏）

当時のままの黒色大理石の額縁とテラコッタの柱

スチールサッシ（入札室）

本館・東館のスチールサッシは、そのほとんどが昭和41年頃に、アルミサッシに交換されましたが、唯一入札室に当時のままのスチールサッシが残っていました。
この窓は、締付ハンドルとグレモン錠で開閉できるようになっています。このハンドルなどの金物は真鍮（黄銅）で出来ています。
（写真：© 山岸 剛氏）

琉球トラバーチン（正面玄関の内壁）

正面玄関脇の壁は、当時のままの琉球トラバーチン（琉球石灰石）です。これは大正末期から昭和初期にかけて建材として開発がすすめられたもので、国会議事堂や百貨店など、華麗さを求める内装に用いられました。琉球トラバーチンは、一般的なイタリア製のトラバーチンより固く、床材として使われることもありました。
（写真：© 山岸 剛氏）

装飾レリーフ（正面玄関扉）

正面玄関の扉に取り付けられている装飾レリーフは創建当初のものと思われます。扉本体は改修されているため、レリーフだけを再利用したと推測されます。
また、この正面玄関扉の建具枠も塗装の調査で、塗装の最下層で確認できた金属素地の状況から、創建当時の材料である可能性が高いということが分かりました。
（写真：© 山岸 剛氏）

リベット接合の鉄骨階段

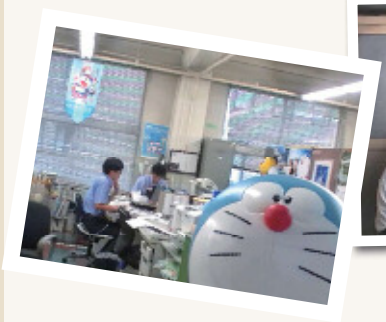
リベット接合は、コークスで真っ赤に焼いた鋲（リベット）を鉄骨の孔に差し込み、反対側をリベットハンマーで叩くことで、鋲の鉄が孔に充填され、その後鋲が冷えて縮み、鉄骨を強力に挟み込む接合方法です。戦前から東京オリンピックの頃まで鉄骨の接合方法として広く一般的な工法でしたが、高力ボルトの普及と溶接技術の発展により一気に衰退し、今ではほとんど用いられない工法となりました。

〈建設にかかわった人（塔屋）〉

本庁舎竣工時に配布されたであろう「竣工記念誌」には、市長を始め建設当時の市の役職者、市会議員、職員の名前が記されています。その中には関係者および設計監理者として「臨時建築課長　元田稔」の名前も見えます。
その他、この記念誌には工事事業者や材料納入業者までが列記されています。
工事を請け負ったのは、株式会社直喜鋳鋼鉄工所。その他石材、砂砂利、左官などの職人の名前までも入っています。

おもいでピンナップ

本庁舎は、創建から78年の長い間、多くの市民が訪れ、多くの職員が通い、多くの行事が開催された場所です。市の重大な決議も、友人との語らいも、この場所で行われました。
ここには、多くの想い出が詰まっています。



川崎の発展と市役所

川崎は江戸の時代から多くの人が集う場所でした。
川崎市役所を中心に現在に至るまでの発展と変遷を紹介します。

江戸

江戸時代の川崎は、東海道「川崎宿」として、茶店・旅籠さまざまな商店などが立ち並ぶ賑やかなところでした。六郷川（多摩川）を渡り、お大師様（川崎大師）へ続く道の付近にあった「万年屋」という茶店は、やじさんきたさんで有名な『東海道中膝栗毛』の中にも出てくほど有名でした。
現在でも東海道の形状は概ね変わっていません。江戸時代の地図で現在の市役所本庁舎の位置を探してみると、地図に山王社（稲毛神社）があり、この付近であった事が分かります。

東海道かわさき宿交流館より

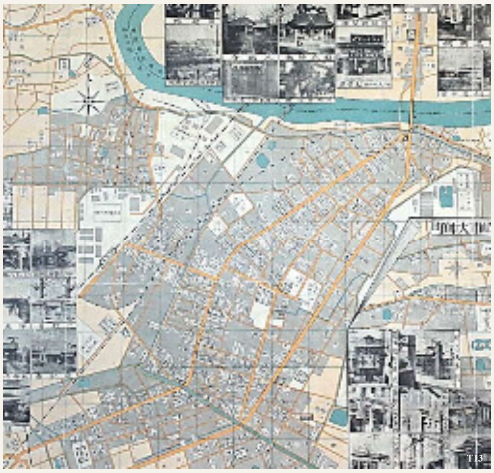
明治

東海道の宿場制の廃止、文明開化と時代が大きく変化した明治期、川崎でも明治5年(1872)に新橋ー横浜間の鉄道開通にともない、川崎停車場（川崎駅）が置かれました。またその後明治32年（1899）には、大師電気鉄道（京急大師線）が六郷橋ー大師間で開通、明治38年(1905)には京浜電気鉄道（京急本線）が品川ー神奈川間で開通するなど、町の様子が大きく変化していきました。
川崎市役所の前身の川崎町役場は、明治20年（1887）に砂子に仮役場を設置し、明治44年（1911）に堀之内345番地（その後宮本町61番地になり、区画整理後宮本町5番1になる。現在の本庁舎に対し、北東側はす向かいの場所）に移りました。

明治初期 迅速測図

大正

明治の終わり（明治45年）に、川崎町が「工場招致」を提唱し、大正2年（1913）に鶴見川から扇町間の埋立が始まりました。
川崎には多くの工場が建ち、そこで働く多くの人が川崎に集まり川崎駅周辺は賑やかな街となりました。大正14年（1925）には、第一京浜が開通しさらに発展を続けます。この年に発行された地図でも、東海道や川崎駅からの道に多くの商店が立ち並んでいることがよく良くわかります。
また、この大正14年（1939）に、川崎市役所の位置は北東側はす向かい（旧川崎町役場の場所）から、現在地に移転しました。



大正13年 職業別明細図

昭和

昭和13年（1938）に現在の本庁舎が竣工しました。
この頃の写真を見てみると、道が京急川崎駅の方へ伸びていて、当時はこの道（現京急通り）がメインだった事がわかります。また、その道の先には富士紡績川崎工場があり、富士見通りも整備されていました。
昭和20年（1945）の川崎大空襲により、川崎の街は焼け野原となりましたが、昭和28年（1953）の写真では、戦災復興土地区画整理事業により駅前から現在の宮前町交差点までをつなぐ市役所通りが完成しています。
日本が高度経済成長期の中、工都川崎も発展を続け、昭和48年（1973）には市の人口が100万人を超えました。
このように人口の増加に伴ない、市役所は本庁舎のみでは手狭となり第2庁舎が昭和36年（1961）建設されました。

昭和13年頃（竣工時）

昭和40年頃

昭和20年代撮影

京急川崎駅から伸びていた道路が
メインストリートだった。

昭和32年撮影

戦災復興土地区画整理事業により整備された市役所通りがメインストリートになった。

平成

平成に入り、川崎駅周辺の再開発が進み、川崎駅前タワー・リバーク、ソリッドスクエア、ラ チッタデッラ、ミューザ川崎、DICE、ラゾーナ川崎プラザ、東口駅前広場再編などが整備されました。
78年間多くの市民に親しまれてきた、川崎市役所本庁舎もこの度耐震性能の不足などのため解体が決まりました。平成34年（2022）（予定）に新本庁舎が完成する際には、低層棟として本庁舎を新築復元する予定です。また平成35年（2023）（予定）には第2庁舎跡地も広場となり、新たな川崎の顔となって、市民が集まる賑やかで潤いのある街へと進化していきます。

完成予想パース

平成24年の航空写真

新庁舎 施設配置空間イメージ

超高層棟
行政機能と議会機能を設置し、最上階には議場及び展望・傍聴ロビーを設置

低層棟
新築復元により、昭和13年当時の外観の一部を再現。本館を3階建て、東館を2階建てに戻して、時計塔が空に向かって高く伸びるプロポーションを復活させます。

アトリウム
超高層棟と低層棟の2棟をアトリウムで接続

うるおいの核
第2庁舎跡地は広場とし、イベント等の開催が可能なオープンスペースとしての機能も備えた「うるおいの核」として、市民が憩える空間を創出します。

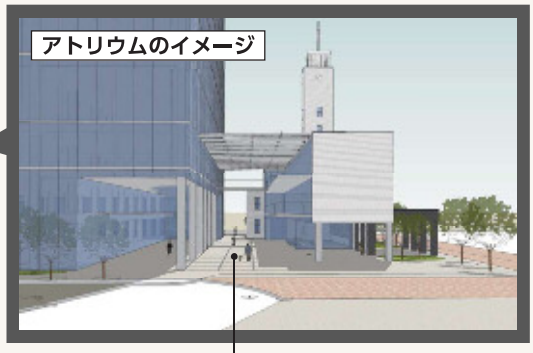
平成26～27年度	基本計画策定
平成28～29年度	現本庁舎解体工事（地上部のみ）
平成28～30年度	基本・実施設計
平成31～34年度	建築工事
平成34年度	新本庁舎竣工
平成35年度	第2庁舎跡地広場完成

低層棟の新築復元について

低層棟は、創建当時の姿に復元します。当時は（昭和13年）本館が3階建て、東館が2階建てで、時計塔が空に向かって高く伸びるプロポーションでした。

設計者・元田稔氏のスケッチ（昭和13年創建当時）

現在の市役所本庁舎



にぎわいの核
低層棟北側のアトリウムに面する部分について、ガラス等の素材を使った現代的で開放的な空間とするとともに、カフェや情報発信スペースなどを設置し、アトリウムと併せて「にぎわいの核」として、多様な主体が交流する空間を創出します。

川崎市役所本庁舎　さよならイベント

本庁舎記念アルバム

平成 28 年 10 月

発行者　川崎市 総務企画局 本庁舎等建替準備室
電話：044-200-0281 ／ FAX：044-200-2110
E-mail：17tatekae@city.kawasaki.jp